

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

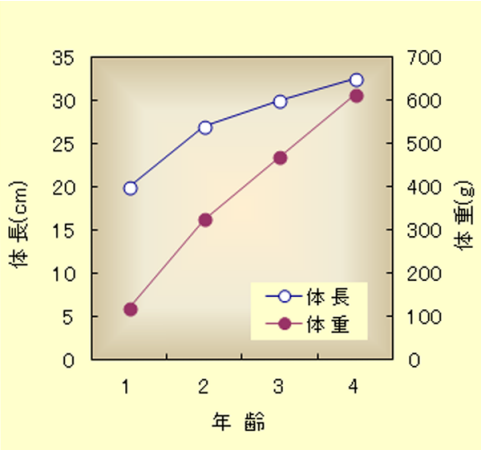
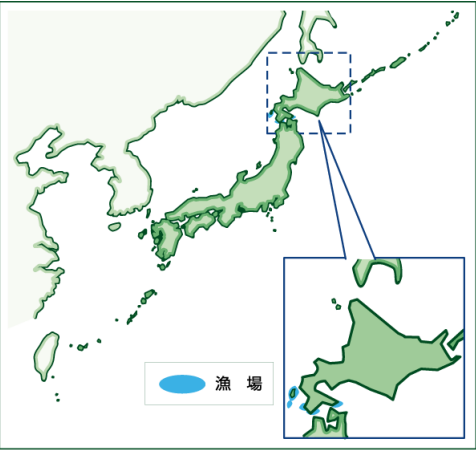
系群名 道南系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明
成熟開始年齢: 1歳の終わり(一部)、2歳の終わり(大部分)
産卵期・産卵場: 11～12月、北海道渡島半島西岸および奥尻島沿岸の岩礁域
索餌期・索餌場: 正確な索餌場は不明、分布域は、北海道渡島半島西岸～本州北部日本海および噴火湾～本州北部太平洋
食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成魚期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は様々な種類の動物を捕食
捕食者: 不明

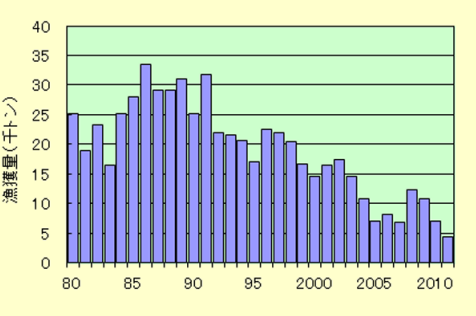


漁業の特徴

ホッケ道南系群は、当該海域の沿岸漁業(本州日本海では沖合底びき網漁業を含む)における主たる漁獲対象魚種の一つである。主に刺し網、定置網、底建網、まき網、釣り、簗などではほぼ周年漁獲され、特に春季の索餌期と秋季の産卵期に漁獲量が増加する。

漁獲の動向

漁獲量は、1980年代前半に1.7～2.5万トンで推移した後増加し、1980年代後半に3.0万トン前後の高い水準となった。1990年代は2.0万トン前後で推移したが、その後さらに減少し、2007年には0.7万トンとなった。2008、2009年は1.0万トンを超えたが、2010年は7,017トン、2011年は4,450トンと減少した。近年、北海道側と本州日本海の両海域で類似した増減傾向を示している。

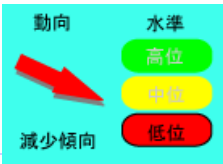


資源評価法

本系群の漁獲の大半は底建網や刺し網など、多種の沿岸漁業によるものであり、得られる情報は限定的なものととどまる。漁獲量の経年変動傾向から資源の水準と動向を判断するとともに、2010～2011年における1～2歳魚の漁獲状況から直近年の加入状況について推察した。

資源状態

本海域における過去37年間(1975～2011年)の漁獲量の平均値を50とし、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2011年の漁獲量は4,450トンで11となったため、資源水準は低位と判断した。過去5年間(2007～2011年)の漁獲量は、2007年と2010年は同程度であるが、2008年から2011年にかけて引き続き減少傾向があり、2011年の漁獲量が過去最低となったことから、資源動向は減少と判断した。



管理方策

漁獲量の推移から、高水準の1980年代後半から、比較的豊度の高い年級群の発生による短期的な増加はあるが、全体として漸減傾向が続いていると考えられる。特に2002年以降は漁獲量の減少が各海域・漁業種類で見られ、2009、2010年級群の豊度が低いこと(函館水産試験場、2012)による資源の減少が危惧される。親魚量の確保が重要で、漁獲努力量の削減が望まれる。平成24年度ABC算定規則が改正され、ABCは $ABC_{limit} = \delta_2 \cdot Ct \cdot \gamma_2$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した。 $\gamma_2 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは標準値の0.5、bとlは漁獲量の傾きと平均値(直近3年間)である。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABC _{limit}	2.1千トン	$0.6 \cdot C_{2011} \cdot 0.79$	-	-

ABCtarget	1.7千トン	$0.8 \cdot 0.6 \cdot C_{2011} \cdot 0.79$	-	-
-----------	--------	---	---	---

資源評価のまとめ

- CPUEを得ることが困難なため、近年の漁獲量から資源評価を実施
- 過去37年間の漁獲量の推移から資源の水準を、過去5年間の漁獲量の変化から動向を判断したところ、低位、減少であった
- 2008～2009年には漁獲量が1.0万トンを超えたが、再び減少した
- 2009、2010年級群の豊度が低く、資源の減少が危惧される

管理方策のまとめ

- 漁獲量が最低水準で推移していることを考慮し、漁獲圧の低減を検討する必要がある

執筆者: 森田晶子

資源評価は毎年更新されます。